

選挙戦を支えた一人の若者



軽部 謙介
時事通信社 解説委員

いよいよ米大統領選挙本番だ。現職の共和党ドナルド・トランプ大統領に立ち向かう民主党の候補者は誰になるのか。2月3日のアイオワ州党員集会、11日のニューハンプシャー州予備選と続き、夏の党大会を経て11月の本番を迎える。大統領選挙は当然、候補者のみならず、周囲のスタッフたちにとってもハードな日々が続くことになるが、この季節になるといつも思い出す顔がある。

* * * *

1996年10月。首都ワシントン郊外のダレス国際空港は雨に打たれていた。東京行きのチケットをポケットに入れて出発時間を待っていた私は4年半のワシントン支局勤務を終えたところ。東京本社経済部への帰任が発令されていた。

初めての米国暮らし。右も左もわからぬワシントン。激化する日米経済摩擦の取材。英語の下手な日本人記者として、目を吊り上げ、髪を振り乱し、議会だ、ホワイトハウスだ、USTR（米通商代表部）だ、と必死に駆け回った日々も一応ここで幕が下りるのか――。

そんな感傷にひたっていると、苦楽を共にした支局の同僚たちが見送りにきてくれた。

彼らから渡されたのは郵便物の束。引っ越しなどに手間取り最後の一週間ほどは支局に顔を出していなかった。ほとんどは「ジャンクメール」だったが、ひとつの封書に気付いた。そして、その差出人を見てハッとした。

アダム・ダーリングの父親だったのだ。

* * * *

アダムと初めて会ったのは93年1月のビル・クリントン政権発足直後。20代の若手民主党員として、商務省にポストを得たポリティカル・アポインティー（政治任命）の一人だった。

当時はまだ、日米経済摩擦が激しかったころだ。「対日交渉チーム」の一員である商務省は貴重な取材先のひとつで、担当者だった商務省日本部長のマジョリー・シアリングのところによく話を聞いた。彼女の「補佐役」としていつも取材に同席したのが、広報担

当のアダムだ。

マジョリーはよく笑う女性だった。そして、わきに控えるアダムも「いいやつ」だった。一度内部資料に目を落としながら彼女が説明していたので、「そのペーパーを見せてくれないか」と頼んだ。彼女は「いやあ、これは部内用なので」と渋い顔。すると横からアダムが、笑顔で「正確に書いてくれよ」と閲覧を許してくれた。3人で仕事から外れた話題をめぐって盛り上がったことも度々だ。

頭の回転が速く、指摘はシャープ。たちまち頭角をあらわしたアダムは、その後しばらくして商務副長官のアドバイザーになり、さらに長官秘書官に抜擢された。

このときの長官はロン・ブラウン。前職は民主党全国委員長で、クリントン大統領当選の立役者の一人だ。そんな商務長官の秘書官になったアダムは省内の各部門から上がってくる案件を整理し、重要事案の報告には同席し、そして長官の海外出張にも同行するという忙しい日々を過ごすようになっていた。

当時、クリントン政権の対日政策がどのように形成されたのか取材を続けていた一環で、アダムに無理をお願いして、彼の話聞かせてもらったことがある。

「なぜこの政権に入ったのか」「何でワシントンの政策に興味があるのか」

支局の入るナショナル・プレスビル2階のレストランでランチを食べながらのインタビューとなった。

当時はまだカセット型のテープレコーダーが主流で、テーブルの上に置いてカチッとスイッチを入れる。記憶は定かでないが、裏と表で合計90分録音ができるテープだったように思う。

以下はこのとき聞いた話。

アダムは5歳の時にジョージ・マクガバン候補を応援したという熱心な民主党支持者。クリントンの演説を聞き「この人は大統領になる」と確信し留学先のドイツから帰国して選挙戦に身を投じた。

ロサンゼルス市東部の選対責任者の一人として、自転車に乗っての戸別訪問に全力を挙げた。これは

「フィールド・ワーク」と呼ばれる作業で、戸別訪問の認められていない日本にはない選挙運動の形だ。

この辺りの中南米からの移民、いわゆるヒスパニック系の多いエリアなのだそうで、一戸、一戸ドアをノックし、クリントンへの支持を訴えていく。

このときの大統領は、共和党のジョージ・H・ブッシュ大統領。湾岸戦争時には支持率が90%を超えており、最初のころ、民主党に勝ち目はないと言われていた。

しかし、陣営の「It's the economy, stupid!」（「経済が問題に決まっているだろ。そんなこともわからないのかよ」という標語通り、悪化する経済に焦点を当てたところみるみる支持率が上昇。ついにブッシュを抜いた。

アダムの子供をこぐ足にも力が入り、選挙当日は事務所で「フォンバンクス」という仕事の担当に全力を挙げた。これは戸別訪問でクリントン支持を表明した家に「投票に行きましたか」と確認の電話をいれる作業のことなのだそうだ。まだ行っていなければ、「早く行け」と促すし、もし特別な事情があれば、乗用車を運転してあげるとか、車いすを用意するなど「総力戦」につなげるのだ。

クリントン勝利後はワシントンに飛び、本人曰く「ドアをノックし面接を繰り返す日々」を経て商務省に職を得る。

米国をもっと豊かにしてどんな人種でも素敵な暮らしができる社会にしたい——。レストランでのインタビューで語られる理想は、米国らしい楽観主義に裏打ちされていた。

アダムには前途洋々の未来があった。クリントン政権での経験を経て議会のスタッフに転じるもよし、大学院に戻ってさらに箔をつけて今度はもっと高位のポリティカル・アポインティーとして再び政権入りするという選択肢もあった。

我が家のホームパーティーに連れてきた東洋系の彼女と素敵な家庭を築いていたかもしれない。

しかし、運命は過酷だった。

96年4月3日、内戦からの復興に米企業を売り込もうとして旧ユーゴスラビアを訪問していたブラウン長官の搭乗機がクロアチアの山中に墜落。秘書官だったアダムもバルカン半島で29年の人生を終えた。あまりにも早い死だった。

事故当日、商務省に駆け付けたクリントン大統領は、職員を前にこうスピーチした。

「飛行機に乗っていた素晴らしい商務省の人々のうち何人かは非常に若い方でした。そしてこのうちの

人は、92年の大統領選挙のキャンペーンに参加してくれました。彼は自分にできる最も重要なことは自転車に乗り、私に投票するよう人々に呼びかけることだと考え、それを実行してくれました」

アダムを指しているのはすぐにわかった。

その悲劇から何日か経って、日本部長のマジョリーを訪ねた。彼の肉声が残るカセットテープを持っていることを思い出したのだ。

「残されたご両親にこれを送ってほしい」

「責任をもって届けます」

いつもは陽気な彼女が、大粒の涙を流しながらそう言ったのを明確に覚えている。

それから再び仕事に追われる日々を過ごし、転勤に伴う引っ越しの準備などをしていたが、テープに関しては何の音沙汰もなかった。そして半年後。米国を去るその日に、アダムの父親から返信を受け取ったのだ。

東京へ向かう飛行機の中で封を切った。

「貴重なものを送っていただきながら、悲しみにつぶされて返事すらできなかったことを許してほしい」

こんな書き出しで始まる手紙は、息子への思いが切々とつづられ、こう結ばれていた。

「家族みんなで、何度も、何度も、擦り切れれると思うくらいにこのテープを聞いた。本当にありがとう」

時に真面目に語り、時にゲラゲラ笑い、時にフォークとナイフの音——。アダムの肉声が残るテープの一言一句を聞き漏らすまいと、再生機の前で家族が肩寄せあう姿を想像する。

米国社会を変えたいという理念に燃えろサンゼルス街でクリントンへの投票を呼びかけ、勝利後はワシントンで政権入りした若者。その思いが詰まったテープを聞いた遺族からの手紙。

東京に向かう機内で広げたその日のワシントン・ポストは間近に迫った大統領選挙でクリントン再選が濃厚であることを伝えていた。

それから四半世紀。今米国ではどこの街でも若者が理念に燃えて自転車をこぎ、戸別訪問を繰り返し、電話をかけているのだろう。

そんなニュースに接するたびにアダムの笑顔とテープのことを思い出す。

生きていれば、もうベテランの域に達するアダム。今の分断国家・アメリカをどう評するだろうか。聞いてみたかった。

